世言抄壱上

もしほよする塩乃子なれともかくさむ趣をしほまするとも
なしはゝ波やあふみの海乃濱の真砂とふゝ
そめし一足よするたとふるあしみち毛豹もよ
ひきちの山松乃葉をとりあつむるより古人
言ものの義理をたくへてしうき世のちりのおりしの
のなくしんとすゝゆめのうへよりいはて
またやさあれともあらふ者に心ゆかしく我身よ
しらるとりと見まかしきおかは思ひたれ海
川をのまろ清がさめていりよするそいさも
ほとそのいふ事ありれと世言などやまん

あまたゝり六種乃あらそれ孫伝しあらそれも
多くいまも伝ふ世にそ残りし

一 式目證議
二 以呂波詞
三 四季詞
四 非季詞
五 神祇
六 釈教
七 述懐
八 哀傷
九 山類
十 水邊
十一 体用之物
十二 可隔三句物
十三 可隔五句物
十四 可隔七句物
十五 一之面可嫌物
十六 輪廻の事
十七 嫌詞の事
十八 可忌嫌の事
十九 發句切字の事
二十 句數乃事
廿一 片字五様乃事
廿二 執筆の事

廿三　一座法度乃事
廿四　會席作法の事
廿五　和漢篇

一　式目濫觴

夫連歌根源を人皇十二代景行天皇四十年日本武尊東夷征伐の時甲斐國酒折乃宮にして新治筑波の詞よりおこれり扨本式目元来を建治二年に鎌倉藤谷にをいて為相卿の述作也ゝ其後新式目を大切とする為藤卿乃作也法を後普光園摂政殿應安五年にあらためて被加也而後新式目追加と号せり又新式今案とて後常恩寺關白殿下諸の好士乃規矩をと集て家御法師より相談ありし時乃宗匠より御法定けると云々享徳元年不足をも書添へ又数ヶ条宗祇末遊志

乃後爭論及諍論事出来ぬ依之文亀二年ニ
肖柏老人　勅をうけたまはりて諸説をひろひ
出改む今あまねく用る所勅式同此一冊是也
景行天皇四十年より元正九まで千又百年
後宇多院御宇　建治二より延安又まで九十
七年　後亀山院御宇　延安又より享徳元迄
て八十一年　後花園院御宇　享徳元より文
亀二まで又十一年　後柏原院御宇　文亀
二より元正九まで八十年　正親町院御宇
元正九年より元之建治二より天正九まで三百
六年也　今上皇帝　慶長六年正月清書之

二　以
以呂波説

一岩船　天津神国の神乃船しらふねすり
旦本記上巻に天磐橡船といふ所も同事
なり水色にあらすといへとも舟乃字また
つる乃ことく可備七句や

一伊勢大神　ゆかりの色をも名取やあふてる神と
いひてもかなる名神かなとといふ歎や

一いり大家　伊勢大斎宮の秋院御建
ものいりきれさやとりふやいせまてを竹の
みやのはなりや賀茂まてもあらし川乃院

一 和乃事や
放生 神祇や始なり秋や生類に二句嫌
八幡大菩薩の神力によく老年中に惠
放生とおぼくぼろぼし給ふゆゑよりけれど
されば流ちのひき魚数くおほく給ふ
須長者子流水池魚乃事しよるれあまりて
一 いろひめしのことと まさる兒屋根の命
いづれも舌日はしら乃家乃うちにも
なり日本を神国とするによりてこの兄や
ろ乃法事を出あらはすそのや
一 いみはを 神祇なり神まいりなど法のふ

まづ見待らんとて松竹榊などは法をあや
一 家をはいはれ 釈教や恋にあらず家とそ
字はるをかくはきらふべし
一 出れ日 朝かにありあらず法ともに打越
にあしその折しれやくあらんしその
ところにはあらゆる肝要や
一 いはつき 月日に不嫌之妻といふ字まで
折嫌や秋や恋になり
一 いふひの里 雑や恋にあらずなるなと
よりきらふや
一 いとはふ むかしを生類に二句嫌いなど

さしあひす

一 岩いそは引合て二句之一句はこれを於くと
も通てある也

一 岩ほ なとより苔砂おもてをとも通てあ
るへし

一 いはや 居所よりちかし嫌也へし

一 いはほうち 居所よりあひまするあしかも
くるしからす

一 岩木 と消くさる詞人倫乃うへなとには
いひすてともこうへきものや

一 石 たゝ一文字はすへあるへし 前後嫌て

と云説也し於くとも通てある也

一 岩橋 山類にしかするてきされ岩はし
はしの字山類や

一 石清水 八幡逢坂にかからされはきらはされ
なり大方を八幡相坂也んよへし

一 生田 と云句は森と消きて又それ乃名
所の名は嫌すても不可付之説侍く

一 池 此一名所はし一也 新式目にも是之時 数
多しうれ所乃文字ふにとうひ 敷之

一 池 と云句に廣澤也付る事也しかれ
は生田を消くるにそのはるへし 説侍く

一泉に水と云字つゞき色のしきを夜やとさなる
はつれとすまじ雑なり
はなれ里は船をつくる事不嫌夜分なり
いさりといふ事門まである色のしきを

一稲 一ぞし將一出なり秋の田のるなと
おほぞりるてありいねのかえりいなされ
やうもなし

一衣裳の文乃花木共 桃梅椿とい人やまを
木ともにみれ色それ〴〵に季をもはゆ色
に二句可嫌数冬いろ花染なといふ数なる
へし

一文 とこにうつろふふるとくうつれめえ
ふる事悪し又ふる錦の数嫌や
家風に歳あなし吹ねまとしきとけな
といふ数にかれも風乃名や二句嫌悪し
かとよき風と云字まて同字去や居去り
うちあし嫌きらふや

一はゐ色川と 居所二句あり居所より
去すと云説悪し

一唐 二新式までいかいかりやこ二やあまさ世
千代はひかゐまをも二やあくしいかり
いかりと二もなし

一板屋 名所より二句嫌ふへし名所の詞いろ
はなやかにしてといふ説悪しあまたいふさ
まくらしのうま
一入逢 より入の字おもの字ともより二句嫌
夕の字は八字に不嫌といふ説あしく嫌ふや
一市 一名所は一此類多し
一いときなき 小子苗なと付たる不可然
いつれも上中も如此の類分解をへき事也
一いとせ 人倫よりいとせ稚の字より両句とき
らふ也是は色又は付句をもきらふ事すといふ
説あし

一生死 みむさきくいれちともに二句嫌述
懐より述懐の詞に異り沼を
一命 一身躰に乃数乃いれちおくとり色て又
あるへし然を二や
一ゆふし色 たく一古郷古文よりかしな
といふ詞二句きらふへし
一猶 より海なと二句きらふなり如此本れ
詞いつれもたく一するなし
一いやしき ふ付句もくるしからす他准し
一山河 く也二いわと一いはち一両とり色
で里やいはく二の名を折り嫌ふや

一いひ得てかくりなきなといふ句く　いひ
かゝへてそれあらはすみれ二句嫌也
一いつしの　なと云詞あまた一也其晩也けり
其も何の字に打越しく二句嫌へし
一いかくきん　なと前後の文句のいひまても
たく一也也まて有てなくては又可為佳作也
一いりふきん　上乃文言にてはまた也此可置
一いはうは何乃字二句きらふへしさて
いすといふ詞悪し
一いくは何乃字付句可嫌打越ては不苦
一昔日　なとえりは又乃日二句去らふへし

日影なといふ数もあまたを嫌はす
一いふかうよる文意にて如何なとのては如何也
云詞ありつれも二句嫌へし
一文字乃なり面をうへく八を余の数字
二三まては下打越ては一流く也り嫌とも
如何つゝなといひては打越にいかゝ
といへは三川也いひ三日なといひうへて
折りは一流くとも事也四也又六七なと
のうき字のれ是一向不嫌之付句も不苦百
の字を千とも面類に二はかりあるへし
志のれ也も新なりよ新くしまたくなかろ

或は仕立やうにて句数のまさくさだめなし
数なくも二も四句といへり
ろ
一 ろふ　居所乃数なり
は
一 発句の脇　挿物より嫁なり雑なり
一 花　四なり三も不苦と云説あり　いふ事
も二三四まてその花も折くゆるなり
一 花の定　をいふあても分論にも花や雑なり
四代肉や如此なる事書置ける其の座
いつれも雑や付物によりて其法あるとさ

にひかれて書様に成る事あるべし
一 花乃ある所より嫁姫やまくらの花紙物
乃花同おとこひかきもつらはてあまたある
趣さとらんなれとも其説有之一春より
夏秋冬になるゆゑは一代花おほくつけまき
立句うつすましれにはなくはきてし不苦也
一 花に付る風雲の数と新式遠輪廻乃所
又之を用語は不及其法は後にゐる花に
風雲月に霞雪との数手にたくぬるの事
折りのは其句数揃て又あるべしと云
事なり候事

一 春の宵　月乃やせいはまた春雨なりとも比
興やなと兎角あしからすせいは悪し哉句
作りよろし悪し

一 はなのちれ　より梅桜なとのちる事とせと
嫌ふ数あまたうち数なとも字さりなり

一 はなのちれ　ちる花の物作りは悪し但の
けの物作れなとしてうつす縁語と

一 花乃ちれうけ其許あり　せいふ説悪し
はなのうけも花の方をみれ隠れ字なり漢

一 よそ花新なくてもよし悪し

一 はなの香　袖の臭なとせは嫌花の句也

一 なとより袖の香人臭なと雨に嫌ふへし

一 花乃あるし　人倫や仕可候句作うち海
の事にしはかまくらに人倫さるへし

一 さるとあるし　月城友打ちし人倫なり
あるす

一 花の姆とき　もせまふうくへ其のや桃隠物
あすれ打ちく人のたれ事なれとも初学乃為
に書し載之

一 花乃雪　桃隠物樹物や姆に嫌ふ月前は
理りなれは見ともやうらんうためや

一 花の春も　の波花乃滝は上は類多方り

一 きらふとは捷挌筆物にかいつまも有けり
きらふやさんなりともなの誹因前といふ也故
はなのちれ誹をいふ是もしあまき捷挌の時に
はつまなりさしうハ支師説そのや
一 花ともいふ句に吉野山とよくかしこへても
猿にあくすたとひ猿といふ字入せなります
但猿にそ春とみる誹なりけるをいふなり
一 花にやうと云ことは二句嫌也といふ
説悪しけれど嫌へし雑者をなやうわけいふ
詞に花さるへし但可依句のわけ也けり
一 花に吉野付たる嫌なり萩に宮城野の類

より誹田因おなり
一 花の都　正花や正花になりすといふ説悪
し近代人のいひ出せる説なり不可用之
一 春の色ハさもなの袖に捷挌や正花なるを
但可依句の誹わけいふ也けり
一 花衣　正花や捷挌より二句嫌へし衣類の
ハこ本や誹をしなの袖と因前なるへし
一 花さり　正花すりを春を捷を書の事や
式にも真似至しくれもなく後手向揃捷挌なり
一 花も　発句脇を三にかはさ面にせを面に嫌その
奥に注之十の物より下句の花悪しなと

一 古説ね中一説すへからすのしらせ
荒野はきくおなしの座うなる物法くる
るす通一如此の仏揃ふるふある哉し

一 発句にしとれもあつかひなと五句嫌なり
こしきもいひて発句は一向きらひ申す

一 氣乃字 四とえあれとも花紫に此名誠法く
ぬかれもけるも乃事ーやうのにて行れにて
花又句主やおちにも又を松此もなと同一句
を嫌ものを考し是そおもときらふなり

一 三乃月 只一略 一三日月一と新式にあり
星も雲も春のよの月なといひて一長字
なる也明なとと云て一三日月乃うをむなと
いひてれ上三や夜の月冬乃月関おなりもの

一 以色执所非おやまう侍執有り所論之略梅
おに一統季は一以上二つり三日月を四季乃
品まあく一すり一座は三句のきれめくく内に
入るるを発たく月と云ふ略其三は月と三折に
分て一季にもあるを云仏や

一 春の字 もしくはとくりの法帯如式目
よ春はなりあ極さといふなり

一 春乃日 とうよなりれんあつまても永日と
そとく日まてわくと可嫌秋の夜と同前鼓也

句ありよ詠へき也
一 はつの雪 是ハ花の雪なとゝ詠ぬるを
とき中古の義也今ハくるしからす
一 春風たくひ一季の風と入て又一
也あまた嫌も近代ハひのゆるよとよりす二
木ハ秋風松風同前是ハ風とのもしく入て
二句なし秋風松風をハすもゆきもの(も)
し紙入て二句去へし
一 橋 只一字ニ一名ハ一渚橋一是のうへ
はしなとゝて一と式目ニある之多く沙汰也
てうる見ハ可為是ハ浮橋を又たて

うへはしも橋の字なきハおなしと嫌へし
一 橋姫 句論人嫌ひあり
一 立山 小山の立山をはとるて嫌さらに
山代ニハ郡也と嫌也
一 京 ハ野二句嫌あくし 松原ハすり野不
嫌おなしまのはらなとは野と嫌也
はらの事也
一 遠 小野はらなとはとうとかて三へし他
拝りよ詠へしと有る抄物よ見ル是
一 是又野はらも詠ぬる世用とも云ん也
はらのゆりやうつりハひのつをせなもて句

一 まといふ題にて所詮きぬの為にても五句さりや
濱ひさし 波のよせくる真砂地ひさし
あり然るをさるをいふ題にみ濱ありあるに小家
をもいふや句によれへし 後も居所に二句
嫌や継句代をもてよさまて五句可嫌の也
一 鼓有之並南郷の名所にありぬ南乃海の
ものひ所しと云名にそいよく居所なり
也式抄摘りしいふ也里
一 植 居所や非抄摘に非居所と出る不嫌や
一 はしね 居所に二句嫌へし
一 ひそしと云 言葉にとある時は清畔になしとある

同字なれども付句をとるべし かなきを
一 をみなへし うすのいふ事もに面顔に二はある也
の嫌ふの詞いつれも是に准ぜ也し
一 をわはし先年と云所もいつれも一座
一 まし二流くあるへし
一 りうかと云ことも雨雪なとまてしなくみ
おのゝもおもてもおもてに嫌ふも五句去れ也
一 をのなをみ 只一座ありやともあまたせり也
まとしてを二あるへし 式昧数物に濆し
一 謀 まつりまりて言葉にも二句きらふへし
一 ろつう三の字をそ之なけまれ面に嫌や

一 なやといひしと発句にもやを一向不嫌之
一 花といふては雑をまはしてあるはあれと
いふなる一不嫌作也と書故也
一 をとなる二句さらぬなりけるてもし如此
のてはとえ濁きてみれ二句さらふや
に
一 贄 生類に二句去らふなり依句神祇あり
わかるる哉をすれとや贄なといふ事ある
又釈教の事也
一 庭は神祇すり冬なり庭は桜に拭嫌べし
一 庭と加ゆの君折を嫌也折を替ても又句
主也捨りよりて折を嫌へ花折りえつまて
を二句去をあまたあり
一 庭は一句宜居ものの為に一庭のそしべし
各別の事なれ共ものの列とたくしく
いふ故りおをと又逸べし
一 庭のつゞみ山 山数あり二句さらふべし
一 まをまつを居所に二句嫌べしものいふ
字中も二句有り
一 鶏 鶏鳥其もれの鳥同事也異名を中に川
当ちとえさけなと列台く二字の色を継
はをと見近代用捨のこと也

一 よとの海 水うみの趣なるゝ所に条に
近江の名所に入故に式ちみ所に三句さ
らふへし

一 匂ひに長面とさらふへし くはしくもる
しの所に載之

一 にせらふく花ある面に極さる拠也し
こまてもさも此やうに入

一 紙物数 さおやときらふさのも面取り色
であるへしたとへ雪打まを嫌といふ色々
卯の花の雪なといふ色をもまたあるゝ
なり続ぬく

一 錦 にしきは色のうちもよし衣にもあやにも
はかめていふ色も花もみち嫌や如此なる
をもしの所にも載之同意とも所にも
三ヶ所にもものこまぬ文字のえんにひかれて
為其とさる也

一 にとまり まさに くと也とひるゝともいふ一
向あれときらはず

一 同にとまり またにとも云詞同前不嫌なり
わかひなとやもくるしからす

一 にてとまり 二句去にやうそにもとまり此上は
とく字の事ともからぬ此数なり

一 かやつり 姨すて七月廿日は信州更科山
まつりに候よしうけ給り處也
星をとなふる 帝王の元正乃儀奉年星
武拜し給ふ歳帝如行下書り載之
一 ほし 月日星に三句嫌や日此日月次此
月並を二句なり
一 星月秋 姨すて月の字は去又句嫌へし
一 飛乙 一かとしき千きりなとゝくしして
一 以上三ヶ条之時島迄てしてのたれさす
一 めともなし

一 時鳥 に涼しきなと付事悪し指合
あるあり孫やへも時鳥に相遠なるなり如此
の分別事家や
一 鶯 只一秋分なり為遣りありす
一 うた 冬や秋かや
一 ほそ江 そのうまを花木にあらす候その
ほそ江なとゝ申ても句嫌ふ不や
一 なとゝいふ 又野へ山色なとの色の字二句
きらふ故也
一 花此見まて なとの如此と云詞百韻にり
二 けるまや 他嫌し

色

一 年ともて なとゝ云詞ハ色はもてなといふ
詞一向あまりときこえす

一 道行人 なとの色にあらわなと二句可嫌
也

一 豊の明 夜かえりあるすめる乃字にて句き
らふ也

一 年 二也勢と一ゝとしなといひて一こと
しかいひてそ年二れうらなりとし也
とあらはすゆゑ也

一 年こゆる なとくいふ句は春をそれなと
付る事同事也時をへたてゝみかは法度なり

一 年暮て ーと云句春近き句を毎度此数指
出すあに載之句主乃さるゝ下意ニ新治を

一 遠里小野 名所也居所ニあらすといふ説
有之居所なるへし

一 戸 室也宿也なとの戸屋戸なとも是居所と
替れりとあり一節乃戸なれとも室の内なる
へし室の色なれとも有一室の外なるへき
九ゐいふ説を被者又室此外に流意を天乃
戸を始居所も各別の事也

一 戸に宗而とあり なといつれも面を嫌や

一 戸ばかりに秋の鳴れば付句ならでは嫌也
奥のあるは時雨は来ぬ哉を
一 しばたくと聞くと紙帳をなどと世は秋
にかかりめぐる
一 とほし 其所より二句去る
一 出舟や 水辺よりも其所に懸ては又句嫌也
一 琴ひく事 などとあるは浮物悪し 此類付哉
みな法度也
一 ての井とれ と云詞秋冬なるに
一 友 只一鳥獣なとに一月花なと友なとと云人
猶乃也ともは折々とのゆるとも云説あれども又一
又あるなり
一 やども躯 は友乃字不嫌之といへるも他折越
紙嫌起さるといへるなり
一 虎 千句より もたく一なり 兎猫犬狐など之
むさ猫の類みれ百韻に一也
一 鳥 只一表に一 此外小鳥と云はその鳥に
一鳥類といひて一禽獣生類の惣名なれと
なり 稽場の鳥をもはしらず雉なりうちわの
とりもあらはなり秋也とて又 此外に鳥名
別乃そのなきは乃あるなり又句去あり
鳥乃鋒鳴 なとより鶏乃声なくなるとも面を

一　きらふすり法度也
一　鳥の鳴に鐘のなるかねこなと付句と嫌
なり法度也
一　やま里　人みかとつまなと又句去也同し
雨不苦や子やま里も同前
一　とつまの羽風　式に流行さるへし
一　鳥　ようかと里雨詠きらふへきの
一　やま里のぬる　祈ゆるあとしもいれきも
夜分りあらす
一　とりくの鮮　なといふ詞笠数えり可嫌と
きらふなり前とも字いまた又句去也法度也

一　酒吞　夜分りあらす　菊と云字にては又句
きらふなり
一　やま里　水色や船なくてそめるといふ色は
思さやま花なとをかの半やとま里山なと
をりとするをと合歌の事すれ稀なるを
なまさや
一　燈　只一滴の灯一泫の灯一折りとの色て
折上三なり五句去やりつれもおとをきらふ
なつかさる大きおとを嫌や面をうの色てくる
しのうもといふるは悪し又此頃不可
後世火紙指さる故に面をとうるて去るかし

也いふ所ハ此理ニ可治定同事しといひかへも
やうなれなれハ破邪顕正のためや
一ともし　友なり取分すり
一とかさ　ふとちたるのやうもふ二句嫌なり
遠也いふ字をハ五句さりなり
一津ふもふといふ字去嫌のしらを
一とくむるズし圓なと付る事無し
事や純粋し
ち
一手甲振　手乃字ハ五句はうるを可嫌早乃字
振の字也ともに二句さうるを可嫌絶也いなり
一子規字　折ニ一つくや綾之異説ニ従ニ東師
説ニ付る所と乃不審也為略師指南肯也
一ちとうし　ふ十の字折とも可有之
一手種　ニ名草付への事をたくさうり名
なとくうしからは
一木黒とけるをも底ふすりめくす
一路と　路との名七句去也いふ事不謂只
五句さりなり
一路と道　との名も五句さり去り但山路
ちなとふ文の道なと云行等ニあるぬみち
二句さらふ行り又淡路なとちみと云め者す

一 らぬ句よきやう如此道二句ならふなり
路に菩提菩薩一句不嫌之たとへし路
のかはり用ゐらん句なくして付侍らん事
用捨あるへし

一 らまくまみらず同事如二句嫌へし

一 数せいふ字のちがひてしもこ文句さらりなり同
前よ不苦花のちがひよ紅葉ホの数なりとも嫌
へし　さもし此所にも入

一 茅乃輪　是て茅原あさらふなとこそあるへく
つゝきは内なく一座ちの五夜なり

一 恋　一句此世なとひて又あるへし

一 笑　と云句よりふのむかひなと云詞同事
なれとも旅句詠付ちやたよへたちきりつと
云侍るに乃其のなかと云ふふのめ付く
まさなくなとて句悪し其の発句はかく
拘そ云ば〈なそいもしのつう遍し是様
乃工夫能くしん悪趣さやい遍至させたる事
よそしもなは連哥もなりうしく発注ある〈
よろ外のそうなる所よんめる故よ如此と
なりぬく恋よそ同きのとなる物や

一 里

一 里あれもつ色　林や猪久此連歌なとより

里文字なり活きて里さる時流れ轉過にたく
ともあるべし
一 鼓膳かぬよりたんとせや
一 ぬし 人偏なりあるいはぬ也せりいへるを
人偏也
一 ぬる なり決二句嫌すわろしくなし同
しろうとわりいはきそのさしききる
はすと云説もや
一 ぬれ 字と云詞なりと嫌面を嫌せりいふ
面 ぬれて ふてに流面拭嫌や
一 ぬれ袖 かくも涙拭なり ぬれくかきすれ
まし恋乃心なくも涙を一向不嫌之名あく袖
と云わずぬれてなどいひても恋也なれどこれに
二句きらふなり但二句隔ても同し恋乃名
句の同ちをきらふ
一 浪めうらなといふぬれと云詞ぬれとく
乃る二句嫌ぬ連とくれわれいさき二句や
一 ぬれといふ詞なりぬ連此あひたを二句
ころもものいや世の詞にも同し
一 ぬれぬとそもんぬとのかひに付白を
不嫌みぬれのぬれとそそんぬとの名もかわひ

乃時をきらふ物何も前事一つにてりうをうか
らん如此乃さうひ成之詞の外何分別専也
一 物にぬと物のぬ乃嫌是を付句斗嫌
一 ぬらんぬとぞらんぬ乃間是も文二句嫌
一 ぬらんかとの三ツの内のとまりハつれも
面顔ハ二なりやとまりに付て嫌のくのうと
くれ三の字面を嫌也
一 哉
一 とりちく字くのありやけくつれ二句
嫌や多くしをおくなとても不嫌くるとるの
かれ上想はくきさるなとも説あれ共不可然
あき色嫌なりをは流をくれとてととさる
くふするておくか嫌との説也や
一 こ方きるのよ色ろなとの我もまる二句
嫌也いりきもてかをとの一のなのとまり
おゐし
一 ちかれらんこか哉らんなとれらんとらも
のりは流くゆ色は同前とあらふとのふ
説あり一向不謂之か是こかかなれをたく
らんやまる付ても緩也
と
一 是乃程かと 居気の有あらまやりふ 説悪

一しほ尓すり

一 岡 百韻ニ二ひとつも入尓ゝる事し 池

湊洪浅淵瀬濱汀州奥尾上麓嵩坂辺谷此類の

上一もゝ尓あるへし

一 年日 但て永日なし 去の日なとのかく

はしくもあし乃事よ入

一 小野 二是も一をみ尓なるへしといへり

一 小船 をされ塗小船也又あるへしと云説

悪ー小舟とはかくゆゑ有り

一 小とは とも城西の名は句嫌無し

一 小も小 をとこも西の名二句きらふなり

一 小とは 浅とさも此名付句はゆるす嫌也

一 をとこのをみな小の字不嫌男康とも故也

さをりまそふ小乃字付句可嫌

一 をとこ子へし 如此之類たく一也

一 をとし孫 樵猿よ二句嫌といふ説悪し

不句きらふへし

一 女 子句ともあく一なり老年廿五迄捨乃

詞といふ至たくしす句なともおもくを

くらしりあましれ乾

一 親 小子二句きらふへし

一 去 よ辞響ホ二句きらふやゝしもひとさに

一 高雄山高瀬川ニ不可嫌之無くし風乃とを
とらし山彼此をとなり何なとあらも二句去
らふや他嫌し

一 高ニ城とつれ二句きらふ作り信の字を
をとつれとよむゆゑなり

一 をたまきさ 緒乃苧を績くとりゑろ苔添ミ
よろをゑきとよみ机を枝をなすさ木の
事なり絃を嫌ゑの句拵ろりよあへし
他嫌し

一 遠近 也旅くそてもあく一首ヲとちと計
みおまや城の色てあるへしとちとちるま
二もあるへしとちとちろり 遠の字近乃字
をもろり二句きらふゑし

一 旅ろの 述懐ろりあらす

一 丑

一 我是 とふても人偏よあらす 平人乃いふ
隠さ羽よあらす 如此乃用捨第家や但可依
句也いゑを世用也

一 和田比海 海ろりおもと嫌なり田の字ふを
嫌いす

一 乗さし舟 揺なり川船をふひふなら添
也も浣比河船をふへなり川渡の渡し舟

なとしても猿や
一 冬祭 たとへ木とも又挑燈乃名城いつも緑也
世名ニ冬気也ともすへし 注云世名あり い
はくたりさう色その花りも祭とも世名ニ
も以て也いふ色也
一 冬菜 たとへ一時外ニ菜摘とゝしも不可也
之なにといひても菜たく一や春や
一 まさ田 うへそのに二句嫌へしそやませ
なといちし式ニ嫌也きた
一 ますれ草 まそおくといふ字ニ二句嫌也
薔薇ニも萱草といふ色也住吉ニ積花是也
み清補樹ニも萱草ありあふきとなりけ伊勢
大和猶治ニも相違也見ん其ニも治定も萱
草也代毛詞ニ忌草といふ色也
一 ますれ草 一ますれ草といふむや
雑と云字ニ二句去らふすり
一 初ニうへ色数 こひなとニそくろしのうち
たとへも深き秋乃露や葉ニうへ色ならんと
いふ句ニ山路今も花ありつのおくなとの
ふすり慈ニも同事なる色ニをりきニ
うへ色数嫌すり
一 人代哉 ニ鳥乃う色これむりすりう色これ

一 なとの秋をあけをきらひ候す
里の遠は哀く二句嫌とことひ乃わり
遠に近のきぬくれ事あれ戀乃立られ
近の哀くとも面を嫌也
一 旦られり錢二句嫌あれかの字同音但
句にも類趣さ免
加
一 神且一神代一句神一世あれやも名神也
に引合て二句あり
一 神に同えなり二句嫌也案新式にあり
一 神楽冬也夜分也神より面を嫌なり
一 神楽月にて明付てそを嫌しなといふ
説悪し又句嫌といふ也
一 神とい字にうとさひくといふ詞面を
嫌なり神祇にあらす
一 上とも云字ありうへとも云詞二句可嫌
一 甚旦あり皆旦なとの嫌也甚の字旦の
字一切に不嫌之
一 亀井も氏也名氏にあるすと云説悪し
一 河舟一切に水揚澱の河船補揚也満まて
を用なき舟小船なとつれをとふはあらす
一 閑巻しとある句より柳と付て壽酒のなと

一 畫しといふ説不埒なるしのかるき
一 門言の雨 夜雨に嫌へしと云とも連俳也
ありし嫌と云るはや淡除句無遠嫌猶也
一 蛙に河此字付てもくるしからすと
よろし水為すり
一 貝 雑也虫類やゆらん生類乃嫌也ゆう
ますさ付く事なきものなるを続俳し
一 明くやたを消のなきといへんなり後も堂
乃字に嫌なり
一 内にお戸窓と同しとせまなれともそのあひさ
いへ門まても雨と嫌やともこれの本に奏載之
一 内は由宮乃門なるとの數又句嫌といふ為
やうもなく同し雨と可嫌の也いゑ為り
一 首途に門雨城嫌出の字にて二句嫌なり
居所にあらす
一 壗 二なり酒はといひ盤とせ二なり為く
しるかりくと二ならし
一 うすりにのこふ雨と嫌やのお水松居所と
いふ説畫し二句さらふや
一 古はるとうと水葉うかなとししても居
所に二句嫌二句乃搦を評なく好ゆても是なるを
評やと云説畫し評にあらすこに治定を

一隠家　たゝ一座に打越を嫌ふへし
一家の事　城なといふ事を居る所の
うちなる事を思ひなとうれふる人の住所
打越す事也
一苔　たゝ一句のうちの名所ま
て一句なるへし
一枯野　句端をすり虫なとを読て秋也
如此之物下草乃四季代内入待まても
一句あるへき所に入
一枯野　うち物に打越を嫌ふへし
一あら田　同前なるへし

一田をうゝる　と一色てあり城なとにも
句うち草の事もあるへし
一桃　と称来同し打越可嫌
一うき身　と云おうきぬとなと面を嫌
とりふ読思し打越を嫌なり依但し
一の里　只一冬や雑に付ても不苦候得とて
国との治能をたろし　めさんためは蔭を
和漢ともに四民芸使といふるしありの里
の後なとにもてんすり此治よりの里へ打鷺
なとに付てもくるしからさ
一鷺の里　一小たのうの里一歩たとのの里一

以上三ケ月

一 鶯の里と梅の里なとの名所と嫌へし

一 かり場なとは三葉秋乃田つくるは不

可法拝を相遠さり法具也

一 猿乃かけむ 季里場のかけに不嫌加里拾

を拾ひしたく時里なる所へ付やたくし

季里もの掛むまた花しきん句なくとも

かけに嫌也 続て可分別事也

一 落 去一枕一以上二や詠落そ去秋の中

おあらくし冬子との句にあらぬ去の

里の色のしらき詠河原も秋や越路におゐて

とうく渡りといふ色ある人代わや不別事也

一 落 二をそてられとくらは静かなくなりと

うくしてもひても又ある色のしもと

一 落の新る りとまは去不なしみす続也も

新る二乃うちにある趣さし免

一 あるとひふ句有りひとつさし去れと

なといひつれも二句きらふ色し

一 の引る 去て一つ去やの外に用心すへし也

去田山なとにあり行去すへ捕也といふ色

作とせ懸る也といふ名家にもいかに遠也

季さ遠を未定なるはるのかくし馬

やせけるとむまてをくてしひとい入ゑ雉を
はしてゆふなとの説世用すや句の数哉
しの茶よされと打すし

一 かし鳥 櫨といふ実り果蝿といふ説
ゆる付てを蝿へ季の物といへり

一 蝉 もとより又鳥の子もありあの数いひ蟄
て二ある事有法子と云字面を蝿也

一 宗法くきのはし 生数や鵜も名は季也此
出やたらし七夕のみすも生数ありあり
さるの天河とき色ゆゑ色なりと

一 数き火 生数すり句編取不なり

一 鐘 只一入逢一拌数一更名より一拌数更名
不定なり自法為各別者不及法法定以上剤
式之詞や各名たらさとはとかとよとさるの
ともえ晩鐘とうそのはとする数なるへし

一 永法法法入逢の外そなれをよりのうす
むとと晩鐘也中古より用されやもいふ又
入あひより用ありや

一 うけろふ 生数りあるをたくし句称
不よなへ昇の世ゆめり

一 冠 むね数ありあるを

一 篠 とひあとより眉乃毛なとの数つけへ

一 かうきうなとの戯人倫にて色つくしきを
一 頭の雪冬にあらしを降物にあらしを
一 霞より折ゝろ嫌なり中古きらはすと
いふ色今を嫌ふさるさまゆん
一 のきそへの音名残よりあらしをといふせり
あり ゝ
一 新と陰 山居二句嫌也日うけ人うけを新
なり山のけ水を陰也はらくの声を新也
うこのさるの声を陰也あかけを新なれ夜
小声ゆふ気けを景なるに其義なまをあまる
るりなるむ法のしき物也

一 陰新衰 いつれもあのあひこ二句可嫌
一 陰 おりとさくれ〱まも二句嫌と
いふを山水の下さの類なるもの下又
まこそれ下なとの類又清ありとと月乃
ものなとの類不嫌うくれと仕立ふよるへし何
まても嫌と見へきるへし
一 新ゝ宮根垣形なと嫌はず陰はいそ根の字
嫌とも云説あり おなり
一 風小野にかうしなといひくもの又句
嫌也や松乃響き荻の葉なとは二句嫌也
一 風ゝよ鳥の羽なとは二句嫌迄也ゝ其の

一　かけりまても御祈をゆくに可嫌之

めかしの錦　喜也衣數にあるを數にすり

下着まくれ上るを注を

一　聞く色代人といふ詞有り本乃字二句嫌

とこひ説悪しきらはす

一　方に行付てもくるしうもくはゝりを

きらひます

一　本に聞こゆてきこえよりてなどみれ方乃

字有り句隔て句嫌之

一　こゝはるまるしくふとれ行といふ字

二句きらふなり

一　行衣とこゆる意根也袖に行きとも聞こ

えくといひて心秋分なり

一　聞こゆるおふゆる嫌をなど不嫌さらふと

いふ説悪しといゑり

一　月花色に聞人分との色の字二句嫌也

一　菜たぐひ色　秋分ふあらず雑なり

一　のこえふつんの字二句嫌也有り先をあま

城きらひます

一　麓山の松えも本中に新氏字への字とも

に不嫌合別の事や行をくつんいつ物や

一　並に染物不可嫌之のそ　染色のそめる

といふ句也

一 たゝるなとゝ云詞は落葉のうへなとにいふ

一 菓とし二句きらふ也

一 此句 山水の文字は最二句可嫌候事

一 のゐろさ と云詞人倫の上にてのみ成

一 色し點なとゝりて不似合時の分別

専要なり

一 くさのゝ色は何にても端の字や色は字出

一 といふ語不得意時の色をあとゝ返の字や

一 の色をみの ゝ色抔にも見申も二句嫌也

式読り部の声 とうゝ色をみるなとゝ有之

帰思せまて又句嫌とい色ほ不諧是も二句也

一 のさるといふ詞一也 けれ かなてらふと

もて又あるへし

一 めくれ なとゝ云ことを又句をさりするへし

候事

一 我十昧分のねりひのは一すりの発句乃也

めやうよみて書三べしまでしとくゝめるる

白猪あひといふ説を十句部色を添法なり

其如ね申説や我ともそや一説不可也法

詮指て不入事なれ共無既を可被信也

一 我乃字 発句のかけてある色のしきぬの

一 ひのもとを又一あるへし

一 雑と云字に色のていねかてふと云詞在
二句可隔両句を嫌へきは流意あり

一 うなしき一座に二句かつくろさすと同
しかくのことく心しく可准之

一 字なし物笑かなしめぬ事しなるは春との
なし物なとをわひすらんやうらあく船の
波ゆてうれしさをふと云も同おほ子を
かなし物を同し様にそのおよるまてあらひ
やうらしれ色へし

一 いりみなとうしひやくうみなとのうみ
きらうすとう色ともし詞まりまて嫌へし

いつれをも川ふし水といふ色へ

一 若やりかときにあるのかなといふ為悪
二句可嫌二のめのてはさせや

一 くもの雲のなとれうくうひれのもし二
句嫌や非准之

一 字こ川不懸のうゝ見れるし本如両とき
らふ色へし

一 ゆきと新字の事 むゝうくうすくなと
いふ詞斜句もおりあひをきゝわすいへし

一 よ

一　代二と云を神代一　君の代一　くるへしこ
れ外の外佛代分としてなし佛代といひ句数
を大君これは代や

一　代は世　又句を云やめく見せおふく代なと
しらの代やよはあふ坂なとさあめ時如

一　時鳥は中とも云字二句嫌へし

一　恋は雑々のわらすも人の雨や海なるもや
所治平世一句々恋と云も同るもや述懐の
恋一　佛の恋一　恋は一以上五もりみ句をてよ
を花盛なと云を千時なる浮世道恋恋述懐
の恋なる生前の恋後の恋子として佛の世なり
いはれ去もわたを嫌や恋の恋を以て　去のう
ありなりとも一かる句し誂をなりまた
てえなるま

一　案内　文選ふとなりよすて人とよめる恋
状持人も此文字入てみ恋をまて人也也や

一　遂のやも　拙抱居所南本不嫌へし

一　遂生　居所は二句嫌なるよるもさとはのる
を居所より不嫌之

一　よもきふ　浅茅生なとの生の字わくと嫌也
百韻より二はのるま両まてかるへきの

一　喚子鳥　たし一義也前々の秘説ありたく

一 長の鳥とくゝへ可也無常春乃そのや
雲雀とハ平なるそのなり深山にもよ見へ候
らく也
一 秋と清月　何かにあらす秋かにあらす
一 秋乃鳴蚊　小月の時分ハさ嫌くなきも句
也有り嫌ふなけれ共も三句めつけにく
きものなり又心あてもおもはしきを夕
に入日なと付るほとに此事やかやう乃る
一 万端に分別あるへき事や
一 秋の暮くると云ふ事何かにあらす
一 秋字　百韻に二あるへし
一 宵　何かにあらす秋乃字不嫌也
一 とこしもといふ　恒常住の事也秋乃字の
心入りあらす
一 横雲　秋かや柴ゐりひくくらるを云ふ也
あらき月代めまいとくしよめる可心得事也
一 吉野　に花つくるなり花よりし野棒く執
事無ししもてしてのかよも入や
一 よし聖　小船もあれ共も舟に見無もき強き
一 連歌にも趣さるまかる也ハ愈ら
一 吉野乃國栖とこさも人倫なり
一 淀乃河舟　を猿也とも其の河舟もみひろ

一 あらすは前中も載之
一 鈴は老二句可嫌たとへし句祈によりて
不嫌之 玉乃をなと清きをくらしつゝを
一 よそ一座にみ一あるへし 絶膝と
一 結而同 まみる二句さらふなりたく同覚
ゑなとまをえの字不嫌之
一 是よりて なとのよもし二句去らふ色
しこよ家と云もわすへし
た
一 竹の字 祢なる生似句はよれ趣き免ゑ不
用りうへをのりあらん
一 竹乃 芳末打越似可嫌たる入りゑれけ
五句嫌也同しれたるよすくたる三句嫌なり
一 たるふ行く志れしともよ又句嫌なりちい
ろあるうけとて云もたけ乃事也同又句嫌也
一 竹は林 竹林橘金の事はいゑ子也も式
に只は宙乃をや一や似たけは可為又句去
一 竹也たる とゝめ置物論七句隔りたしたけ
その里なとゝいもとふけは又句さらへし
一 玉似なるゝ似物懐表の詞は山中はあり
絃をも玉と一懐紙三とひ是かくさゝなと
云事なり表のさきを法花よ五事也似物

此さたは露のさたありて連歌にもまの事如塵
義と海とにまぎらはしき事也以上空や
一 たゞ海とばかり玉はまのことなどいはれも又
句さりや
一 浪よりつゞく海　人は嫌はず字にも句はさる
て可用海女と申しても同前也
一 たゞ水の三を名ある所の本の如しをまさる
でさらん詞なしさうれバりさうひさ嫌
ふめりそれへきなり
一 さゞなみあはれはの字は句嫌也あらはれま
然ありさゞなみとは色里也玉字殿の家あるま
一 玉のをと虫なとの字二句嫌ふ也
一 人の玉のをも水の波にもちかく嫌ふ事
又徒然の玉のをとかとのやうなる事いのちは
嫌ひてしきをもちまていのちはさざのをと
よのなかのさゞのをとらしおりそう色て二
あまへ一　一句各別の事なれども可有あ
一 それあふ事も玉のをとらしさ名のいろを
吉野の河の瀧の瀬はとなどよみ玉はしゃ
頃しめるけかまつ玉のを坂あもとまよもて
空よみ哉を被のとられまれとならす又可也
法師のたさの小柳空よみ哉を塵義のさた

なりあまさ乃んめりたまも志まるゝなれ
やもめひ多かりしんまえみゆのこゝし
一庭のたまのをとききそ庭ばいのちたすなり
以前にも此載たて以のちも一あるべし
一玉章より絹二句可嫌従縦句不憚之
一魂に玉の字二句嫌也魂をとりわけたる海れ
となといへるも玉の字ゆ又句嫌べし
一孫子句よりも只一字より熟の数より用ゐる
事も有御当別経乃類とるべし孫曽不能
知と先聖乃残也定式にあり至極従生熟乃
さとさあるものとらえも心要べし

一田からおせなどの類ゆなるその嫌や
従嫌し
一田より藤原なとゝらん句てもうへ植より
あるすまる康遠にとくいひて木綿楊ゟ二句嫌
うゐしいさなとよひても同二句嫌や
一田より苗代早苗とうりなどのやうなる
そのいつれも二句嫌なるまゝはさもたかふ二句
きらふ嫌なり
一田ゟ稲穀わらかなと一切より悪し
一田乃香岳西ゟ二句きらふ嫌なるとたくいか
定めとまる岳西なり

一因幡ハ白きをなとよりて子むかしさを付て
三日めに雨ふるをくるしからすなれ共
うへとの嫌あるを慮し
一たかろきの　小田代字きを始色ハしきを
一山鶴　地の字同前それをくるしからす
をほるらと云文字一字けりてとよめとや
一そのむ乃鳥　田代字ハ七句さらに論し
二句と云説あしく
一斎　ハ精進なりたてし字すも鳥にの
まの鳥なとのやう子代事を嫌ひおうも
織之といふ色も少哲家事あれともにハ入
一遠山ハ遠乃字二句嫌なり山の字ハ又句
去ふへし
一竜田姫ハ名所に二句嫌と云説ハ分部なり
一式に名所なる字とのへて佐保姫同前
一竜田ハ紅葉をそへしかりまた紅葉なり
立田を不付宮城野なり　萩同前
一高野山　釈教にあらす弘法大師以前より
乃名所なるゆへ也
一高根峯嶽　山にまても嫌る物と嫌や
一高根に岩　杉檜なと又句嫌や高根なと
称ある其山にまても隔て一句か

一高砂の尾上に松もすへからす付也出しハ
よりけるにられ付たる事不理窟也付合や
一高砂の松　山類也名所にはあらす山類に
あらすと云説悪し
一岩井といふ物と嫌ふ所ある二句きらふ
気色しし句より執心し所に不可除句也
一瀧　只一名所十一瀧津瀬と一花の瀧殿の
たきにかけるは又一ある事ハ是も式のたきと
いふと嫌ひけり紙揃ふへしと云へし
一瀧　山類まて是は嫌ふて水辺より許なり
滝津瀬とえたきを瀧は事なり山類の
あらす。瀧は河瀧つたいつれも山類にあ
らさるとしたきつきも山類のうれの
たしや文明説沖川なとと云んや尤可用之
一たき又なとなりのこ人の筆もなと
付る事也あまし用付とて筆物より嫌
事しなるとといひかたきこそよし
一ささひとも宝おまし行の説嫌也
一七夕　花尓や星の名ふるまて月日嫌
やあすの河のあふ数年たもてるにそ天
象ま二句嫌のものは自是般尓りすを五句可嫌

一　七夕とあまの川三句さらふなり

一　猿乃字あまく一猿なとゝ云て一座を代ゆ
ひかゆるおもれ乃二や

一　さる人二けかに浮世れとかひ分もとみ可有と
いふ説如何はやいる也

一　猿乃所んゝも両八句乃内にもすへし　只
所んゝを両にすきなし

一　猫　たく一けやうれをみくうらみあり
たらちねに花さしまきすれきそしも不苦

一　鮭海く　ゝ云詞捷梢よ打越を可嫌

一　薪　ふ木二句嫌也　樵夫を同みそら焼火句嫌

一　たくのけふりなとゝいふはけりのうちまてを
遠ふなくすといふ也

一　たくの　ふ火二句嫌なり焼火同前也

一　たく火乃事　りめられたくひとたくの
ねやるゝをしかひの数みなたくひなる
いはまもたく火は数を如此分なくひはれ新
としてを同前や灯は数をみれ此分也

一　民はうすも　居所ふあらす民をもとゝまる
人倫なり

一　袂ゝ　ふ手二句嫌也し袖にも手を是を不嫌

一　たそかれ　雖とはいふ字あり二句嫌又可然

一　是も二句きらふ朝時分夜をきらひます
れうりは連に伸ふうおさへります組付句を
嫌ふへからや
一　なまつ虫　なとゝいふ詞悪に付ますなれ
ともつて姻虫なとゝいふもく悪也
一　懐紙に清書して果若者の事也
一　五十韻されたる二句きらふへしたくを
むも同前也
一　たとへは　不道と多筆にするやうなる誹
付句にてることを嫌ひ侍し
一　為教　ありたとへ二句嫌他連句誹諧あり
たとへなとを二句やみえてたとへをきらひ
無ぬ事也思ひつりたる也故をたんらうする
所さなり此おのゝを張敦に不嫌は上大事
也よ家あつりふ説すゝ承ほむ法のしく
よろぬるえりたと弟子相かしよ二句まて
らふへし
一　たゝ　なとゝいふ詞の名二句去なりうゝと
くの名のことし　の名の歌無お
一　ときは　なと云詞二ちりまするゝ此なる
詞は川　まても不苦
一　いろは　ともこしとてそうそのたつきたねる

一　鳩なとよみ然るをたちゐる木乃事やまうて
とつゝきまうぬ山中はなとよみあれした
ちをもえうぬといふよしあるなり
一　よのむせいふ淵懸よみて二やらさのむと
いひて毎月なしきも打越一所くも
あるへし
一　まいらぬ　も不断成るものなりのやうの
毎よい句ろ句ゑとし揃ん哀いかりを組合
さるをのなり
一　ことのたまひとまれ　ゑと云下知乃こともも
みゑ二句きらふなり
一　も嫌　う　取ゑおもゝす無我下生れ事なるを
一　そう　田折ゑ一所くや侍かゑなゑそう一
虚云そう然なしの首よ一組上六ならし
一　虚空常夫　いつれも三代日曲を嫌やそう
よめそ難しと虚字なり
一　うら　り天文吹ゝ霊打ゑ以代まも二句
去らふへし
一　うらたの色　おとのやうなるうらゝは百韻
うりた一　さる下絶隔し

一 外面点一や面代字に而須嫌や面とそのゑ
ても同句去なり此類多し居所之用や
一 園墨筆 此等もにうへ其のに折越嫌乃句也
居園所生とは魚も居所也いへれこ不被
いれきも居所有あらす
一 きうけ 山路とも是その中の秋なり人倫
なあらすそうつなることなとの数はつきも
うをそのより二句嫌なり
一 袖ぬれて にけるさ二句嫌なり涙なまし
なくた、露霜ふぬれてを不嫌なり
一 袖の面袖の露 ともより 懐物也大木濱の
あらかなり此たく浪抱まては仕立さらん
句なりとも涙に不嫌是のしるし懸りなとす
なることの心に仕立たらは恋やなとこゝも
二句嫌ふ可ぬ文字代所に数入や
一 袖の兵 あめ 数みかへ恋なり焼香なとはふ
まてのちるうり法度に
一 うくあさ里 なとひのけさる詞浪物
より二句嫌也
一 そと一字にあれのれの数二句嫌やそのゝ
ての類やもえしの取中も入
一 ろふ なさいは詞字きりや法度に

一 ゆふむらには笠山とうむらなきといふ事
一向あるまじきとなす
一 筆柄に打綴塩摘松作草木なとの燈火の
上人をぬれ塩膳の燈思ひ乃燈なとすれ松
作れ燈木の類皆そのなの所そなり入や
つ
一 月よしの神 名神なり月よしの森を名所
かまし名神を名所とりなしす
一 打 面に一作く八なり但名所のうちにあり
八なくやもくろしのしまとまきをしも七もを
月のるうめらん人乃海とふ事如新式にはを
春月たく一をゆる一三旦月一のやうのる計
乃分すそに志まをは余建治之式目也而治
義友冬乃月一作くをゆるを秋より一以所ま
なるやなも三季のるに一以上二なり三は月
を四季のうちにたく一や法らし春一季乃
うちにあすりやも月と云明と三日月やとこそ
あるへし夏冬同おとらしいつれのさんなり
やとも三なりうあるへし月を秋とうなり
八もあるへしれりあさ乃あるかあらかつき
なし他乃季に月ありてやうて又白三句乃
うちにより秋乃季不可然

一 月よ日は此日うらあしとも嫌ふ乃日あり
き日くもれ日くさ〳〵なる両乃日ひ新日
日をもやなるの新日次乃日なり又日新日
乃いろ新日夕日なとれ新もおらんの天象
なる中ゆ色よつなる三句なり

一 月次乃月ありきゆ〳〵きやよひなとこ二句
きらふなり

一 月ありきゆく孫生不嫌長月神無月を
又白嫌又雨をも月とも云字あれとも少も不嫌

一 月乃言葉両方不嫌之とも天象降物也よ
嫌とふん事也夏の涸入なる也降物降物の乃
たる事けりをひてたにゆき霰不
混合中の色なるをも又因おふつる霰雷よ見なし
なる料なしをなるもものりそのよなる
色のうをあし月花なと草花天象降物その
なつ色と両方よ嫌也いあり

一 月と見く時としきをそて木のまの月見送
てなと又色日不見此字結ひてそやるなと
いふるす不諧

一 根此秋花の哀とひても不嫌よあらす
といふるす寄秋の秋といふ色也もたくし
やるやいふ色の結ても絶分とるり趣をと見

一　今日は月　秋をとまつ月入を逢ふ説ありといふも
すゑ月三日月の出れ夕月秋ふみれ恒秋分

一　月は自　長閑するりと出てあらば好士より稿
られも此題にしらるといへり似錯句なれ

一　ふ月のやも可依恒去云と

一　月は読めりし人倫なりあります

一　月の友　恒人倫といへともつゞきにうるし
ひとと云ふ春のをたやし依句新可為人倫

一　月とむの兎なともするなり嫌なり繊維く

二　月新とれくさて二可去といふ事不謂
強のしきは新をもしらひとく去る可去日新閑前

一　月のてしが　塩より面を可嫌海を氷色や
但可依句定といへり

一　月草　月の字に不及句嫌なり新とかのめく
月草なとといひて其式は天象なり

一　躑躅　只一流くしも木なり　藤は草也
浜てに載之

一　鶴林鷲峯　棲たる人しし山類と載之
ま又但鶴林鷲峯棲物山類にもせよ不嫌之
其あつて中法嫌をいふ事今まさ上古之
不嫌義は用てしりる面し云くかくの
ことくなるよくく見正く趣きをのすり

一 流るゝたぐひ一つといひて一ゐ山いひひ聲
て二ある事多しけれ前句もきれき
雖も鳥羽田なと二句嫌ハし候べし
一 常燈 但夜分ならしの雨夜 一折を
あくまのするを見付たれときためや
一 津國乃なかくの事 山城いとそぬなし
いふ歌名所に打越を嫌すり如此なる詞也
て分まさる鳥羽田名所ニ可定候べし
一 難波川のつゞしろあまつ興川なと
乃川も不嫌名所たぐひしかるにくきやう
但しも如何と云々
一 あまつ なとゝみ川文字又句さかりや百韻ニ
二たるまといふをいたきを
一 汐より船塗ハ不嫌之但汐干なとより塗
人乃浦よおくもなとすれ祈有ともしも嫌
へしるとそ流るゝ蛇付句もせむるしかしを
うちあしのよをかるといふ魚のあの數れほし
可分お事也
一 流るゝ舩 但猶異ニ竹繋舟船にハ入流ハ
貢舟ニ楫を絶てなとしてもよもひにあるまし
一 つれて なとさきそてまつきるつみなといふ
事さへし候べし

一 寡婦なとゝも観念なりつゝあるか更てなと
も力插秋なりあらす
一 作りふれ　殺ふ作りられなと書きて　家川
る色みあへしあくし可依句他去席
の功者のむりを以色も可多分かる也
一 妻とある所ふ妹なときらふ色也
一 つり木　う色このふありもめ山け類ち世
も志きるゝりなれとも以次類之
一 使　他人倭犬なとの作りひとせしるゝ
とおりゆ色の
一 作る　さりとひしれ面ときゝ婦ある
一 つれなし　といふれ松杉をうし松杉なと
云ふつれなきを面白し俳乃由付て君わや
一 残雨　つゝきられ　きなといふ詞たく
一座ふ一以上二やいつれも耳ふつ詞も
多きを色のしそうし此ことく乃詞の数を
大方二作くせん必要へし
一 つれもなき　と云ことを世の字ふ嫌といふ
説不謂きらふ色りしも
一 作る多く　一座ふ一と云是但大略旨なり
悪ふあらすといへ色り句りふ秋へ
一 作くとまり　百韻ふ二なりの上の句乃作く

ちまり嫌へし

一 はくなりらん　して　なにの数まて
なくも二句さりすり依嫌く
ね

一 寝　字田なりけれを是非なりに殊める鶴并
ならくつふを閑おなり皆寝乃字に面下を嫌
鳥獣の寝所も含外の事也又あるへし

一 殊覚　ハ更二句嫌更も殊さめてしみの猶
なりゆゑなり

一 殊さめ　なと云詞脇才三ち外面連歌より
こすそ殊ありくなりしなりくゝみあれもなる
多くし遊音八會なとはまくしゝ
正也山義縦り　指南とも番侍る

一 眠　は物くるも二句嫌なり

一 ね寝　ハ寝ぬ字共ハ面を更らふへし

一 岩ね　垣ねなとはもと可嫌但新なとあ
新しも嫌色のしをも

一 宮ね　とかねなとの君おそのゆゑや
な

一 なり神　ハ名神なるへし長神と出にと云又
中神とつまやうでもり之

一 難波　波乃字不嫌けり

一波の花　なミには花坂のくれんにても正花
也但其季の季や植物にて又句嫌や如山
吹雪浪花の類なとゝ入ても正花にはあらず
春にてもまう色雅てもしも但句移り
またなにをとも花にはなしとも句替はえ候
なりと雲も正花にはあらず春にあらず

一子つへの雪　冬也西方に嫌之似物の嫌やう
雑物一揆嫌可用所如此西方不可混合物
も嫌之さなき物も不嫌之名あまた數式乃調
まわりふありるを西うに混合するとえ
わんの雪乃かのみにかりかくれるこもいろ色れ
かよひて西方に混合もせぬ色り

一波の露　海辺ものや秋なり

一波枕　舟をも結ひすてし如何とかいふ説色し

磯洲なとまても乃ふとけくしなる哉也

一藤かと尾花かとよなといふつれも波の
きかよひ句嫌なりと云遠にて定めしかす

一水の道　是一なりれて一以上二なり漸の
かのれ草はなれてなとゆゆめともあり

一へかやゆふ説不可

一かゝりの國　山數なり嗅子鳥さくらなと
かゝれ所也

一短夜のうらミ　かこと詞也色ニ打越嫌也
作り事ニ流人なとよみ色ていふ也是も述
懐ニ二句嫌へし但可依句なり

一なけき乃事　なといふ色恋詞ニへそのほか
二句嫌也其外ニ離也色ニて述懐ニ不嫌

一苗代　春也うへそのほかうちあけなと可嫌
新発意をといひて又あるへし

一極子　色ニ石の竹と又あるゆへ人一如此乃

一なくさめ草　なとの類植物ニわたるます草
此字ニよりて又句さらふ也

一涙の面　涙物にわたりて面乃字も又句可嫌

一涙乃家　涙物や秋や
なミたの家乃面　冬なり涙物ニ打越をと可嫌
冬の面面色にてみ不可嫌之すりかゝる乃
面なとの面面乃異ニ多く一あるへし

一涙より袖　川袖袖のぬれくなと二句嫌但
涙句称来りも袖乃袖の事ニ載之

一涙ニ袖の月なと二句嫌といふ色ニうてよ
やや秋月なとくいふ色も様ニ嫌なりこ

一涙のつゆ　異なりそのそのなり

一涙より人のほく二句嫌鳥の鳴虫のなく
とも不嫌なれとなくといふゝ二句きらひ嫌也

一 虫ほとの鳴 又ハ人のなくを二句可嫌
一 鳥のなく と云鳴は字同様なれとも面を替
也 然に鶏の声と云声とかくらへし同面も不苦
一 鐘のなる うなるとなとハ句嫌也
一 なること 如此の類百韻に多く一ッなるへし
一 なる神 鳴神 雷神 鳴神といふ字は嫌也
一 なつめ 二ッなり共なとなむるなといひて
まめの外なりあるへし
一 なの花 ハ同不嫌同類といひてハ二句嫌
一 なすとみるとまのめに嫌とも見え不嫌之
一 半天 多く一字ハ面をと可嫌事ちもしく入
一 半天 に秋半なといふもくるしからす
よそのもしく多くてはせとしまてけり
一 名只一座に一ッなとてりまくある
へしといふ也
一 名に名はかりをきらふ也
一 能波 たく一座に一也能の字波の字也とも
一 に二句きらふへし
一 中 はうち二句きらふなり
一 中意 をもて又なりなるとあるへし
一 婦人 嫌也中ともと云字中も立と云字にも
二句嫌意乃中なくしかゝると嫌へし

一 存命ハ長永乃字やらもハ二句可嫌

一 わ字ハ殊の字一切不嫌之

一 待ならふなとハ馳乃字二句嫌ふおほくに

なかす面を見らふをし

一 なひく かたなひく面と嫌へきなり

一 煙乃字ハたちのほりみつ句ならるヽ嫌やあ

らぬなきさを見句嫌なり

一 煙ハ此字ハ打ちあなたへ添さなさいとき

なきされなれい山きもききヽ事添き句之

くるしかるへき

一 煙ハ打すくかしふかれむなし友も

ふつそうひとふみちのなてりひかく乳語

みれ二句嫌や

一 宴ハ打あ海添りなそうのひふくありふく

あやなし袖くかさもなをなそといふ数五句

きらふなり

一 なつ 面我嫌や三つなのんひまそしなけれ

やも嫌之てはをとめ三の腕しやれきも面

をきらふなり

一 絲とや 打すくとそなつくといふ

やもききヽ事なりうりそう成の字なり

なりもやの字なるもややもさくらうまいひて

も文字のたらぬゆゑ入りたりとそ定むる
ものなり
一 なりとなれ 是らの類ひは也 されと
付句にくるしき事をえらふへし
一 なるとなるなりとなりなれとなれ 同し
かれなれしといひれまても二句嫌ふへし
一 なるかなるらん なとも付句にはくるしと可嫌
一 かきやなれし一かならん なとやうの事
二句なりやまりなりけるすゑ面はならぬ也
し三つの時や
一 なりかなり と同し詞二也ときまるまて
なりれなる故に一なりて続きて
也ときまるもの也 とあるへし
一 のはらしわその方をひとへなきのな
もし二句嫌ふへし
ら
一 らしとらん 同詞也二句嫌ふらし 同おと
といふ説あり不然一向さと嫌ふへきを
一 らんとなるなとの類は去句とも不嫌
ときまるなりけり 二句可嫌 候補し
一 らんは物らかちらん此類不嫌 一字をは
すりちへし を上にはたつけや又くし

一 つけ句を嫌趣きのかはりは無用
らぬくさらんなとしみにも詞之わかちに
物くさらもし面をも可嫌
一 雁は 蘭すりうへきのや
む
一 霞の戸 旅衣旅寝まくらを嫌といふ説於
旅にても不可嫌雖旅衣旅うちありし衣旅衣
あるも也りいふもの有
一 むろの八嶋 山類にあらす水辺にあらす
一 霞のりやませ 名所にあらす
一 梅 只一 紅梅一 冬木一 青梅一 紅葉一 青梅
紅葉なとも自然のるよきへしあれ新式
の詞なれは於て又ありあるへきか事也何も
は色れあらわなれは不論引合て又とあれ共
心なり五の色のも一もうらりまるある
趣きとあれともうらみあ新人さるも也
此義なり治定也
一 梅雨 不審と新式にありても梅の雨も只の
梅雨く所にある雨なるも又月雨の事如此也
又月雨をきてもまよれとりふるあるなるへ
又さへきるもの嫌あんとや
一 急雨 一折の字は二句去らふまわ雑なり

一 俳諧にも同意ハ口傳あり
一 はやるは村竹字二句きらふ也
一 むら雨に二句きらふたゝしむら苗
植むらなとの類分論者不嫌
一 埋はら 木や雑や花とむすひてを友也
一 埋木 植物にうらあしはきらふへし
一 萍のやゝ うへそのまゝ雑なり
一 庭なと一法のむしろ等燈しろ苔燈しろ
たゝ燈しろなとの器にてこれ上一也むし
しろ麹新秋分なるは但法の庭言乃席酒
の庭なと地秋分たのむしろなとも同前

一 馬 一駒 一にて上二句つゝわれそのゆへなれは驛
るのされむ春も有は嫌するは是のしやひさ
ゆくこまもしやおもまなりおりにと替や
一 しや なとのうちおしは車なれは物にて絶
老肉捨あたへしむ恩ふの心あるも志らとも
ともにある捨業なるをはいれを兵分別なり
作者なりはるへ所そのやうなるなりるとを
一 かし 承事や嫡のことなり此数句たしは
あひとしなけれはもきらひ一句や連歌
も前後当之乃心惟り要なるゆゑなりなり
くも記れ共も載之

一馬場　生駒にうちこしと嫌むまのとめ
むけ関など也
一驛路　関など生駒には越と嫌也驛路とハ
宿はさて勅使なとの道をのりける所あり
日本にも神功皇后の御時よりはじまれり
驛路の鈴とてかりなとする事あり驛長驛
くるまなりとも詠し詩にも驛路に
ての事也
一虫　一松虫すゝ虫は上三なる也此の外蓑機
織面とり逢てあけはる物る虫なとにひて
もたく機織の事也三の外なるは世名乃虫の

うらなきりさへしかるのむし　藻にすむ虫
つくむ虫なとを関など統けてはまた世をし
なとも松むしすゝ虫の准さるへし世名乃む
しにはなと可嫌夏むしなとをも外より
きらひ一虫魚類秋分にありては一兩句世ー
せらひてハ上中えらみ秋との句あり
一世はくひ　秋分なり獣なり
一むかしーたく一あるましとなされ歌さらに
まりむかしにいるしへなとと嫌也
一勝乃勇　秋也鐘槌にうちあしと嫌也
一むかし乃たふし　物すーくうひきそのう

うちあし被嫌也

一 山のはにあらは二句嫌へし

一 逢は向二句嫌也山本のこれ等も不嫌
之但付句にをかるといへり

一 むちうつ　打の字二句嫌也惣而うち
出てなといふ打の字ものろき詞なる故に
二句嫌なり

一 生ある にて命不嫌之生死に命も可嫌

一 故川こし　秋冬也急なるに

一 世川乃花　雪月なといふ色也さのみ不
好ましきなるての世をはなれ事なれ共も

不好也いふるをいふへき也たるあり載之
あるかりあの数おほかるへし
う

一 古　神祇にあらす大木遠く別故詞なり但
句体によりて嫌へし

一 言かしのも不嫌但言葉の道ともの
被にあらぬ事とも故事と嫌へし

一 言のよ志又しまの道なとの数々とよま
れと嫌へし

一 鳥共一つくしてみ一也の通あり

一 うくひを 注 鶯百千鳥うくひすなと

一 あり山ゆ色よもしらさうきにおもと嫌也

一 精舩すりかくのみ火たく火やともうし付色
うしろをうひなくは身も付色かしらき

一 浮雲乃空 秋分すりあらす趣が馬乃ぬれ
非情秋分ふる色かしらき

一 うたらのしこ なと関の秋分はおらす歟
乃やてをおるす

一 魚 流用乃外也 馬獣虫以外 まも三句嫌也
人代わや海れ事也

一 魚にあらうがかしらとのやうなるもの
さらに絶候し

一 うろくづ生類ようらあらを嫌也

一 海辺一句にして一両にうし山内りあり
上おろり見海の趣のこの心ならん海に於ては
述懐や恋述懐なるす有したし水色に至まで
可嫌おやよたつ見のりさしなしよあれ
正述懐や上さへかり見の浪か岸なとよあれを
流れあめつれも述懐の事すれやとあう見
の事なりやもしさつう見多く一句れは
外には山の原とあるやしやなり多し

一 山がまみあるや未事ぬるとて嫌なり

一 まるはかなう見おりとのゆるなり

一植田　植る　打越城堀折田なとも同前
一植　也の字　草木以前の上にて嫌
ともに一句也
一浮木　人をのするおもて
一花はその手にふれふ年のうけれなとゝ又
句去らふ事有年乃うつろふとあるをも折々
ミうふ無之
一うつり香　袖やうも移ものなくてをも嫌へし
以無ら何なりゆくうつりそのあ新し
一落字　折々有　一流なり
上を折　落と云字よをも折くと可嫌のかはる事

折と云字よりて又句也以無ら
一燈火　秋冬やうなり
一上の字　下乃字なるを折まし一流すり
一うき世　世の字よ二句嫌へし
一うき世といふ字嫌れ句ふも字さらなれ句
論無て嫌まと又句去事有
一世　まそのうき世もうれしきも然けるき
なとを見れ二句さし嫌や
一うらみ　なとは浦といふ字不嫌浦
小あらみなしう所し是けれるきなろまうら
さめしなとも同前

一 ゟ物皿　生やせても出也居所を可嫌打越也
一 うへ見えらむ　せいひう句をせ近代二也
一 帖よりまり二句嫌也遠なしと可嫌面影
一 うさゝ孫夜分也
一 うつゆく　まう気不嫌去まうて越くなと
色奥に春ずる積なる由色に一向不可嫌之
一 うちよさを　旅なりうちよさを橋乃一
をちゆゑに所おなしす
一 打といふ字二句嫌なりうちなをひくうち
うをむ数の名なりけり波のうつむうつなと
も盤打也袖などまて又句嫌ひ面を嫌事

あるべしめとめるたぐひにかけるの耕の字あるの
あひさ二句去や面八句の内なりせ二句嫌
なりし山名也といふそうちとしく乃名乃事
すかうちに乃とならとを不深妙味次にらひ
法く共て古詞に人見あや打越ぐのなるま

井

一 岩井と詠れるすりしても鎧居なとの
たゆま又句嫌震のねあるんあるの
一 大井に沈しねきゝつず居所分まとや
一 井せれよ水せくなとも国の字なれば味
れ詞にひう色ても百韻に只一やせ去れ

所作も入すへし

一 安否并に老若二句嫌否并に老若とも可嫌なり

一 猪 百韻ありさく一や雑やうのことく

折りいそよる猶以ハまも一座に一句なり

一 韻の字の事 式目に此余合躰さるる人

なれとまた式ともはと云出る新式目なれ

そ旧記とのこして猶余それと見要さり不

足りめるき詞と誂してあさましき詞

被くれ為に段数不被書すりや

一 式目にハしめんの字 也あるハ猶付合と

いゑ秋を可為なとの事や志くれ多くれ

なとやうもうるくれのうゑれのうやあさ

一 ゆふたり ゆふゆふをりのゆふ閑なや如此なる

其の一句合躰の為りなる曲色ありのんよ

よあしもさらハす付句もくるしからそ

猶夕代字も猶の名の数や

一 韻代字ハ云すりよ詞乃字とて見ま追志ま

ふとれきとて代事也 一切ハ近代不嫌之

一 韻の字 而と嫌似ての不よ执しといゑ

執を山といふ字堂といふ字なとハ同而すも

くりーのしちを新式ハ其式ふや古多くある

是すみの名り外とねのひのゆ其ち〳〵二也

なりを領にとりをとりゆるぬしんしてなき
面を二句さりすりやを魏斜四なれや〳〵ぬ
ひまを二けりてまいき〳〵やを句〳〵
一 の
一 野乃実 句端并旅也
一 生よ鳥二句嫌也藤花にを不面内面乃花
同前不嫌あれとのはうなく〳〵野に二句嫌
をとし乃そむりりを入
一 野うりのうへ句をへだつ
一 野色 百句に一二ある色し
一 野もせ 面ハ字嫌とす其余わつかにおし〳〵を

狭乃字乃んなり道をとを同前あくしし孫
句祈面のんもをあるとかり
一 野とやく 萎けりうへとあをすうりあしを
きらふや四季の折をを入
一 野くえとるを一人の名山の見をあ同又よ
を植柄にはくい之川遠山にもあ〳〵を嫌なり
一 野山の花けるなとひひて是同し植にに
うらあしきらふや
一 のはらやをくきとる詞たく一たりなは
のひ〳〵歌詞同嫌之
一 野に内賊のう事も不似合持合すとて〳〵

されども山はなれたる覚多し

一 野分は秋也然るに五句野は字ゝ乃字中にまに

五句嫌有るの文字を八月乃くものまゝ何為

紙付ゝるハ悪し然人のあやまれるなりや

一 如此乃さうひ如く可分別事也

一 あふみの海 泊瀬乃やまとには国郡なり

めくりあひてはそもの乃もしや

一 法 佛法乃事は法令乃法可之佛法は法也

又法之師不可法ともは只二やと云事也

一 法に船駒なと絶あるまじく付あひ也

又毎車は付ても肉付はえてすらく嫌也

一 軒 二なりの字軒端といひてゆるさりしを

よそに二可之維乃字もしくと二をなし

一 此きの文字をも 船路のきは家といふ

事 路船の色ものなとなくてあくうち海

のきてきの物といひ覚へり

一 のきの玉水 わとまて軒路端見え

一 のきはあやめ 樓橋水色也

一 のき うしひかし風 軒や嫌也

一 春栄 に花の二句嫌きなとをきらうしく

一 二句嫌の事えり入

一 乃字は 上乃字二句嫌に入 のこはそれは同

一 法師 三句まてハ来らぬや

一 捨ても色とのなといふ代もありしを
不嫌之山本栞の外なる法度也
これ

一 老只一鳥木なとハ一句上二句隔へし

一 老より白髪頭の雪なとを嫌ふや

一 若き苗付句を不苦嫌ふと云をあやまりや
晴日色ふの若しといふ色里名利の事也
但打越をも嫌ふとや付句をも不嫌してら
ちありより用捨する類れほしむやうに
是ホ述懐の三句隔くりさる神道すら

一 老を若なさしまする老をも打越をも嫌ふすら

一 老より鏡の波雪ホまつさかへてめのけを
うけくなといふ類又句嫌もし

一 若ホ齢二句隔へし

一 老より扇二句嫌但依句前ホ嫌之とまれ
きすホ物ひれ當なとと云事嫌ひすといふ
述懐し二句きらひ嫌きなり

一 狗の扇 此うちれきすホ述懐をも嫌ふ

一 親子 法ちもても人倫や

一 男 一人様男と云て一たびいひれ外淘すられ
なといひて又所をもこれとこえり雪を嫌也

一 發句にても只一句生類ふ嫌之事の由
並旧説云々ありし是非の浅深不可測語不
可及其沙汰候以上新式の詞なり
一 大井川　よぬせれきらふ也
尾上　は峯なら外や此余所にハ不入尾の字
上に字あるもは二句きらふなり
一 ゆく山　一座に一ッ也此外数ハつれも一也
山のゆくなとハ不あるへし
一 奥という字　指合ハ一折にハ其外ハ心の
外くなとありて一返へしあの数せ隙侶由ゐ不
大須とあるなり

一 松の字　あし一松に松に杉柳にも付といふ
ひとく一 先新式同の詞や
一 松の字　そのしかと松或やおちも冬や
松の松ちも雉や松ちれ羽気りつられなさ
代数秋やゆく人にて此番に一以上三や撰
松なと数も秋やおちもの中に不可其語に
其竹の葉ともの松れ不座の字不可嫌ゆきさ
の数は同新の詞なるとも一句不可嫌之
一 松きハよき　別なとなくて用事可為也
歌雑云々風は二句きらふへし
一 秋　只一句の花のあひさに一燒一浜松の

懐紙とも書てあるへし是新式の詞也須礼
さわとの色てと同季に成ともすへし一折
ささ三んとあるもとの色やうも秋は非恋季よ
一の上二とんと無き題さすの

一花にかはるうちまりさて句数さず如此
とち人制ー来世見ちらて二句きらふ
へし為にし折きの下りなとといふまて
関くさしりも如此の名お世にさうし於
そのなり一そと此とお不通用すへし

一藤の尾乃字見乃字からから不又句嫌は数なし
大略二句は物なれやとも如此嫌来なり但尾

まそれ嫌といふ説あり可用之

一札とて四 挑物より二句可嫌之 新式
から人そのかり又句さらふへし

一おりひ葉 うへそのなりあるなるし

一思ふとち 人後りあるよ

一おもひより次二句嫌 四後を嫌句拆くゆる
おもひ勝れ思ひなといふ色に次より嫌なると
とも成るといひてや木嫌き思ひのひくに次よ

一関といふ色より思ふなといひと所替

一思ひの煙 うひきそのからあし と嫌や

一ねもしは などて文字法にきさる詞とさ

一 雨とり色て二ある色としゝ作法くゝ
袖もひやれ　月花乃字共ま二句嫌
一 思ふ　におもふゆるといふ詞付てよ可然
一 おもゆる　におもひ済りなきといふ詞乃字
えらふなるへし
一 面影　懸にも一向二以上二也面乃字続て字
然も二句嫌也陰乃字也も二句嫌なり
一 おもかけと云句よりや同し嫌付句ともし
草鞋の萱付て面かけよしてとゐることは、
一 色る筆わる　也と武蔵野乃うやはらなく
あるまり面影と淡くる　数首存之れ相同し

大かわやまる也とゐる也　如此候ふかゝるに要也
一 浦座　居余よする見えしかも以是乃おもす
るや
一 紫　衣類なりあらす
一 秋くる　秋分や終時の時も移てかもぬる
降と一切震浴法おく成り可然し
一 記出れ　分として又同しく秋分なり
一 おもかけ　と云詞義なりあらす月を結ひ
下を意よるへし
一 おもろ月秋　に霞二句色よるへし
く

一 羽の海　名所とよめる、ふたみの海あしの
海なとの類や、只あしとかきて名所に
二句たれとも海といふ色を名所なるゆゑ
に名所に三句なるへし伊勢の二見を外国の
う見ゆほしいれまても可すし

一 國の名と、國の名三句色さるへし

一 國の名と名所打越を嫌はきてきらし
かりす一句隔てゝそきらひつけてこそ不苦物
とうちあしを嫌といへるは又二句嫌そのひと
ゆゑ色をは付ても隔ても世さる物を二句と
いふ色は大かたをきらふ事しや

一 雲井より　半天句よりまてつかへしと
いふ色は色をたつる名所には半天くるしからぬと
一説には不可然とありはしらぬは月の雲井の名所
なとにならはいつれも不可然と可心得

一 くもゐ上人くもゐの名所はひき物に打
越を嫌ふへからすそのほかひとへ人倫也

一 星只一月鏡なとにみえ一あるへし

一 雲ゐくもゐ二句嫌也くもゐにくもゐの
外にうひみそのそ一句不嫌之

一 くれ竹と云句に松と付きて又そまの名
所付色つゝくす絶雁し

一 くち木　といひてはかならず植物なるべし
一 草庵　此植物なさい戸は打か帰や頭巾の
いかにもみくさの戸などの類人なるを
一 草の庵　木の下いがが述懐なりあるべし
早下の詞なり
一 落下くさなど色々のはなあかすくさを植と
もきても人そのやといふ該述中同植物
はあかすといへりいはれまでもいひならし
一 草庭より人そのまわり秋をなかし
一 くさのはら　野はあまたときいはず
一 草花　をきて花のくさのいかにも花の色さ
さゞれ石詞とりあげてをこしとあり取捨草
むかしは花は草は庵花のはさ植木の類也
りける色ありける花植もしきといふ文字あり
くん思ておかる
一 花の草はいかほとは花のなさかくさ植物なる二
白花のくさのいゝ合なる白他同夏白帰や
一 くさのれ　といふ白に替けく落かにほれ
なをはちなる同植物なる様菊なとを称すく
一 さ女郎花の類木なくさ花趣なをさせなり
よくくあらの里へまかるりや
一 くさ野　野の名の千種なる種の字なれとも

又句嫌や我衆の千種有と見ゆるなとまても
二句きらふ也
一 くさ枕 植物に二句きらふ草の字持
乃字はつれも二句嫌也
一 くさの庵 人倫なり
一 くさかる くさとのかるやもよう人物有
或は嫌すれはくさ乃字よ又句人倫よあらす
一 くふをやくさ乃海くらうまし 草と云
句数有り あまた他
一 くさ／＼ 雑乃字なり是は他の字有 一句
是とさらはす

一 くれ竹のやなと なと枕言葉ふかつひても
或はうものなり 他
一 車 只一流乃車一ハくるま海一てくるまと三
句ハ内ありうるもしるくるさもを有流乃
ふよやや嫌ハ くるる海も不好词ともいふ
当 衣類有りあらま
一 くり 一ありも一とあり但二あるへき
事 ある所詮一句ありへし
一 くれ 人くに一句嫌也
一 水鶏 夏なり秋冬なり水辺なり
一 鷺 ふ夕乃字又句嫌朝夕といふ事も言有

一 二句嫌ひや中に立なとかも二句嫌也
一 春秋の季より夕時分二句暮乃字にても
同字去りたそかれなとやも二句可嫌欤
一 若乃くれ年乃くれ なと春秋のくれに
同前なるへし
一 くれ/\秋 といふ詞時分の秋にはあら
さくきりてとくとても秋にはあらす
一 くらき うす暮二句嫌へし夜ふかくらやらを
同前なるへし
一 くれ/\ とくるといひてこそ秋になりけり
よそく暮てを秋ありつかすまのなくし夜ふか

暮くし夜ふかくらきなとの辞あり是其時分に
中も秋分すもなくなす但句辞ままありにも也
一 うすくらし うすかくれく暮よりあへすも也
嫌ひ絵を也も暮乃字あり二句嫌也
一 なりひくらひ 分となれ詞を暮乃字まく句
嫌より夕時分なり体催く
一 くもて 三河の八橋なくてても讀也
一 くさを なりさくる字との二句さらふや
いけきもおすし字なれこともよいへつきまで
あの准さる嫌し

110X
539
1